

平成24年度第1回野菜需給・価格情報委員会の概要

1 日時

平成24年7月12日（木）16:00～18:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 北館6階大会議室

3 概要

(1) 平成24年産春野菜の需給・価格の状況等の説明

事務局から資料1に基づき説明。

(2) 平成24年産夏秋野菜の需給・価格の見通しに関する意見交換

① 消費分科会における需要・消費等に係る意見

消費分科会座長の小林委員から、7月6日に開催された消費分科会における意見の概要について、以下のとおり報告。

ア 景気、天候等の要因による消費動向

- ・4～5月は、単価が高い中で、消費が低迷した昨年と比べて回復傾向にあることから、金額ベースで前年を上回った。
- ・一方、景気が低迷している中で、まだまだ消費者の低価格指向があり、量目調整を含め、低価格での販売を継続している。
- ・直売所においては、割安に購入できるとの印象があるため、野菜の価格が高くなると業績が良くなる傾向にあり、対前年を超えて好調である。

イ 震災や原発事故の影響による消費動向

- ・関西のベンダーでは、関東産を敬遠する動きが以前に比べて薄れている。また、海外の日本の農産物に対するネガティブなイメージはなくなりつつある。
- ・特定の地域の野菜は、依然として一部の消費者が敬遠する傾向にあるものの、他の産地のものを手当てしつつ、併売している。
- ・学校給食では、安全性は理解しているが、心情的に特定の地域のものが敬遠される傾向が継続している。

ウ 野菜全体の販売状況

- ・低価格指向への対応として、1/2、1/4カット等、量目を調節して販売している。
- ・消費者の原発事故に対する意識が少しずつ変わってきているので、あえて店頭で「安全」とアピールせず、普通に売っていくことも心がけている。

エ 全体（主要6品目）の傾向

- ・たまねぎを除く5品目については、生育が順調であり、平年並みの動きになると思われる。ただし、北海道において、干ばつや高温となっている産地もあり、今後の動向が心配である。一方、たまねぎについては、国産及び輸入品ともに高値が続いており、北海道産が出るまでは高値が続くと思われる。

- ・生食用と加工・業務用は産地が異なるため、加工・業務用産地の動向を把握することも重要である。

オ 夏秋キャベツ

- ・量販店では、1/2カットでの販売が過半を占めているが、直売所では、カットをしないで売るのが主体となっている。
- ・加工・業務用において、千切りキャベツの需要が増えている。

カ 夏だいこん

- ・夏場は、需要期でないため、1/2、1/3等のカットでもなかなか売れない。
- ・業務用でも、だいこんのつま程度の需要にとどまっている。

キ たまねぎ

- ・価格が高いため、バラ売りが増えている。
- ・中国でも主要産地の作付面積が減少しており、米国産も含め輸入品の価格が相対的に高くなると思われる。
- ・北海道以外の産地が限られているため、北海道産の端境期を補完する産地づくりが必要である。

ク 秋にんじん

- ・基本的な野菜なので、新たな販売戦略をたてるのがかなり困難であるが、生食、ジュース、煮物等の需要があるので、それぞれの用途にあった品種を提案したい。

ケ 夏はくさい

- ・冬の野菜というイメージが強く、夏のはくさいはなかなか売れない。1/4等にカットして販売しても売れず、量販店では売場面積を減らす方向にある。

コ 夏秋レタス

- ・台風4号の影響が心配されたが、影響は軽微であり、出荷量は回復している。
- ・業務用では、結球レタスではなく、サニーレタス等のリーフレタスの需要が拡大している。

サ その他（オリンピックの影響等）の販売活動の動向

- ・今回のオリンピックは、時差の関係から日本では深夜に生中継されるので、朝サラダ等の朝食メニューを提案していきたい。また、テレビを見ながら食べられる商品を提案したい。
- ・量販店では、カット野菜の販売が好調であり、売場面積や品揃えを拡大しているところがある。
- ・外食では、店内での野菜の加工処理能力が低下しているところもあり、業務用のカット野菜に対する需要が増加している。
- ・野菜料理用の市販の合わせ調味料と一緒に、材料野菜をカットしたパックを販売しており、好評である。
- ・野菜を食べることが体にいいことは、誰もが頭では理解しているが、行動が伴っていないことから、市場に調理室を作って若い人に食べてもらう取り組みを行っている。
- ・機能が注目されているトマトは、そもそも販売の基幹品目なので、多くの品種をそろえて、バラエティに富んだ売場を提供している。
- ・外食では、彩り豊かなパプリカが安定して使われ、西日本で使われていた青ねぎが東日本

でも普及してきている。また、現在、アボカドが注目され、サラダ用等をはじめアボカド料理に付随して使用する野菜が伸びるのでないか。

- ・旬の野菜は、おいしくて栄養価も高いため、おいしさや機能性をアピールした売り方を提案したい。
- ・直売に対する意識が高くなり、直売所に出荷している生産者は増加している。
- ・基本食材について、需要の過半を占めている加工・業務用対応の産地作りを今後とも進めていくことが重要である。

② 夏秋野菜の品目ごとの見通し

夏秋野菜の品目ごとに、以下のとおり全国農業協同組合連合会から作付面積、生育状況の概要について説明があり、各委員から意見が出された。

ア 夏秋キャベツ（7～10月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、群馬、長野、北海道ともに前年比100%。
- ・生育状況は、群馬は、生育初期の低温の影響で遅れが見られたものの、5月以降は回復し、作柄は良好。長野は、入梅以降、比較的冷涼な気候で推移しており、作柄は良好。北海道は、融雪が遅れ、低温等により定植が遅れたが、定植後は比較的天候に恵まれたことから、概ね平年並みとなり、順調に生育。

（イ）各委員の意見

- ・加工・業務用としては、6月に入ってから歩留まりが良くなった。
- ・主産地が関東近在から高冷地や東北へ移行する時期であるが、本年は、8月上旬まで関東近在からの出荷が続くことから、7月以降はおおむね平年を下回る見込み。
- ・台風・長雨当の影響によりレタス相場が上昇すると、代替需要によりキャベツの需要が増加し、価格が上昇する可能性がある。

イ 夏だいこん（7～9月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、北海道は前年比98%、青森は同98%、岐阜は同95%。
- ・生育状況は、北海道は、融雪の遅れ、降雨等による播種の遅れや主産地での干ばつ等により、総じて3～5日の遅れとなっている。青森は、春作からの播種の遅れから、10日～2週間程度の遅れ。その後の発芽・生育は順調。岐阜は、播種のスタートが若干遅れたが順調に終了した。

（イ）各委員の意見

- ・天候回復により東北、北海道の主産地の生育が順調であることに加えて、関東近在ものが平年より残っていることから、出荷量は増加すると見込まれる。また、この時期は需要も落ち込むことから、今後は価格が前年を下回る見込み。
- ・本年は、外食業界に対して、安定して手に入れられるだいこんを使ったサラダメニューを提案していく。

ウ たまねぎ（7～10月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、北海道は前年比105%（前年の面積は雹害分を除く。）、佐賀は同98%、兵庫は同100%。
- ・生育状況は、北海道は、5月中旬から干ばつ傾向であったため、定植時期により、ほ場間に生育の格差が見られる。佐賀は、降雨により定植が遅れ、定植後の乾燥による活着不良及び低温の影響から、平年より7～10日遅れ、全体の収量は小玉傾向から平年比70%程度。兵庫は、定植の遅れと生育期の低温・干ばつから平年より7～10日遅れ、小玉傾向。

（イ）各委員の意見

- ・中国及びニュージーランドの輸入品に対して抵抗感が薄れていく中で、今後、入荷量が少なく価格が高く推移するようであれば、外国産を取り扱う量販店が多くなるのではないか。
- ・8月までは佐賀産及び兵庫産の出荷が少なく、価格は北海道産の出荷が本格化される8月中旬までは高値傾向で推移すると見込まれる。
- ・中国の生産量が減少して輸入価格が上昇している。国産との価格差が縮小すれば国産の加工・業務用需要が増加する可能性がある。

エ 秋にんじん（8～10月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、北海道は前年比102%、青森は同95%。
- ・生育状況は、北海道は、融雪遅れ、降雨等による播種遅れ、その後の主産地での干ばつにより、総じて3～5日程度の遅れ。青森は、消雪遅れ、低温により播種は1週間～10日程遅れたが、その後の発芽・生育は順調。

（イ）各委員の意見

- ・青森及び北海道での生育遅れにより、8月までは前年を上回る価格で推移する見込み。8月以降は、順調な出荷が見込まれることから、価格は平年並みに近づく見込み。
- ・国産価格が高値で推移していることから、安価な中国産の引き合いが強く、北海道の出荷が本格化する8月までは中国産の需要が高いと見込まれる。

オ 夏はくさい（7～9月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、長野は前年比101%、北海道は同97%、群馬は同99%。
- ・生育状況は、長野は、生育が順調で大玉傾向。6月中旬以降は曇天・降雨・低温が続いているが、全体としては緩やかな増加傾向。北海道は、播種・定植とも概ね平年並みに推移し、生育も順調。群馬は、適雨により約3日程度生育が前進化し、作柄は良好。

（イ）各委員の意見

- ・この時期の量販店は、需要が少ないことから1/4以下のカット販売が主流であり、数量がさばけない中で、生育も順調であり、価格は平年を下回る見込み。
- ・加工業者では、春先の低温から6月中旬以降の高冷地ものへの切り替えがうまくいかないのではないかと不安から、関東近在の産地のものを遅くまで購入したこともあり、在

庫を多く抱えていた。

カ 夏秋レタス（6～10月）

（ア）作付面積・生育状況の概要

- ・作付面積は、長野は前年比102%、群馬及び茨城は同100%。
- ・生育状況は、長野は、おおむね生育は順調で、6月中旬以降は曇天・降雨・低温が続いているが、全体としては緩やかな増加傾向。群馬は、低温の影響から生育が3～7日程度遅れているが、作柄は良好。茨城は、8月上旬から播種が開始され、出荷が本格化するのは10月以降。

（イ）各委員の意見

- ・天候に左右される品目であるが、昨年のようなゲリラ豪雨等の天候の急変がなければ、今後は、平年を下回る価格で推移する見込み。
- ・外食業界では、国産のレタス人気は依然として高い。国産の価格が高くなり、国産との品質差がなければ、安価な外国産へ移行する可能性もある。
- ・外食では、レタス以外のサラダ商材を展開していく傾向もある。

（3）平成24年産夏秋野菜の需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告

（2）の各委員の意見等を藤島座長が取りまとめ、各委員に了承を得た上で、7月19日開催の平成24年度第1回野菜需給協議会に報告することとなった。